

3歳未満児保育から見た、親子関係が、 青年期前後の人格形成に及ぼす影響について

その1. 精神分析学の流れをくむ、BowlbyのAttachment 理論や、EriksonのLife cycle理論から見た保育問題

萩原英敏

(2012年7月12日受理)

要約

3歳未満児保育から見た、Attachment理論を中心とした親子関係が、青年期前後の人格形成に、どう影響するかを、文献、資料、著者の臨床体験などから概観し、以下の様な主旨の論となった。

1. 長期の発達を見る縦断的研究は、一番必要とされる対象者のフォローが出来ていないなど、科学性に疑問が残る。
2. 精神分析学から出た、BowlbyやEriksonの発達学は、主観性の問題はあるが、現象を見ていると、的を得ている。
3. Bowlbyの理論は、AAIやSSPの方法により青年期前後の親子関係を見れるようになった。
4. Attachment理論での親子関係の重要性が、3歳未満児保育の実施に、大きな問題を投げかけている。
5. Eriksonのアイデンティティ理論を、個から関係性のものにとらえ直す事によって、アタッチメント理論との連携が可能になった。
6. 3歳未満児保育により、特定な人（主に親）のAttachmentの恒常性の獲得が危惧され、青年期前後に、孤独・無力感を呈するのではないかと思われた。
7. 現場の保育所からも、Attachment不足現象が報告され、3歳未満児保育の問題点が浮かび上がった。

キーワード 3歳未満、保育、親子関係、青年期、人格形成

1. 発達研究法としての、縦断的研究の問題点

筆者は、長年、乳幼児から青年期にかけて、種々なる角度から心理学研究を手掛けてきた。さて、筆者も、そろそろ今まで拝読した先行研究、筆者が行なった研究結果、心理検査や心理治療などの臨床経験、見聞した体験などから、心理学の課題である主観的見解は、可有可無という批判は十分承知の上で、大体この様な見解で良いのではないかというものを、今回その1. で記し、その後も論じてみたい。

今回のテーマは、現在日本や他の近隣諸国が最も頭を痛めている少子化問題、また日本では保育所の待機児問題にも関係している。これ等の問題は日本社会、とりわけ大人社会では大きな問題であり、行政能力にも力不足を感じるが、手を子招いてばかりいられない状況にある。

筆者は将来、子どもの保育・教育に携わる仕事に就こうとする学生に、日頃接しているのである。そこでは、大人の置かれている状況は知る必要はあるが、あくまで子どもの視点で物事を見、時には子どもの代弁者となってほしいと思うのである。

本研究では乳幼児期から青年期前後という広範囲なものを扱おうと思っている。

この期間を扱う方法として、1970～1980年代、旺盛をきわめた縦断研究というものがある。しかしこの方法は、心理学の方法論として容認された科学的方法だという強みはあったが、その方法論や結果に対して、問題点が多い様に思われる。その幾つかの点を以下に、挙げてみたいと思う。

- ①乳幼児期の分析要素が多すぎる事
- ②年長になるに従い、分析要素が多方面に拡がり、的をしぼれなかった事
- ③その後のフォローで対象者が相当数減少した事 —この問題は筆者も体験した。それは新生児の聴覚能力を、聴覚障がい早期発見の為行なった研究¹⁾で、病院に定期健診するという、直接接する方法を用いたが、それでも生後3歳までの3年間で、完全にフォロー出来たのは、100名中54名（54%）であった。多くの長期の縦断研究でフォロー出来た割合が、筆者の値より低くなっているのは当然であり、この研究の困難性がそこにある—
- ④フォローが可能な為に、大体同じ地域の子どもを対象者にする為、偏りが生じてしまっている可能性が高い事 —これも筆者がある研究機関に来所した、3～6歳児約5000名を対象に、10年間隔での知能指数の変化を見た研究²⁾で、結果そのものには影響しなかったが、その対象児の親の学歴を含めた社会層の高さに、あまりにも日本平均との偏りを感じた—
- ⑤フォローが一番必要であると考えられる者（質問紙法であれば、なぜ回答の返事が無いのか、その理由となる原因が、今の状態を回答したくないという心理が働いているのではないかと推測される）に、ほとんどフォローされていない事

などである。以上の問題点から、この縦断的研究の結果、幾らかの要素で相関が認められると記されている三宅³⁾菅原⁴⁾らの研究はあるが、明確に関係を主張しているのは、ほとんど見られない。

2. 回想法を発達研究に用いた、精神分析学の見直し

上述の様に、縦断的研究には多くの問題点がある事が明らかになった。心理学が方法論として、科学性を追求すればする程、長期にわたる発達研究の成果は、それにかかる労力に比

してなかなか得ずらい。そこで歴史的にも実績がある精神医学の力を借り、今日臨床心理学で治療方法として使用されている精神分析学の知見を、長期にわたる発達研究の成果と考える正当性は、それが学説の上で重要な位置を占めている事で、うかがい知れる。

確かに、一個人の、しかも精神的に病んだ成人の、記憶も確かでない乳幼児期の事を明らかにするのである。方法も想起（分析方法では連想法）を用いて、無意識な意識を意識化するというのは、心理学が求めた科学的とは異質な、主観的な要素の強いやり方である。しかし、今日発達研究の中でも、臨床の場においても、この精神分析学の評価が低下しないのは、人間の心理の相当の部分に、的を射ている為だと思われる。

今回テーマとしたBowlbyのAttachment理論やEriksonのLife cycle理論は、発達理論の中で重要な位置を占めており、両理論とも精神分析学の流れをくむものである。そして両理論共、乳幼児期から始まり、児童期、青年期、成人期、高齢期と、人生のすべての時期に通じた理論である。今回の研究では乳幼児期から青年期前後という事で、高齢期は除くが、これだけ長期にわたる理論は、他にあまり例を見ない。しかも親子関係を中心とした人間関係を中心とした理論であり、前述した少子化、保育・教育の問題を、子どもの視点から考えていく上で、理論的根拠として最適なものと考えられる。

3. 乳幼児期のみでなく、青年期前後から見たAttachment理論の重要性

繁田⁵⁾によると（Attachment理論は、最初にBowlby（(1969、1973、1979、1980)）が定式化し、その発達過程は、表1の様に説明されている。

表1 ボウルビィの愛着の発達過程（繁多、1987より一部修正）⁶⁾

<p>第1段階（誕生から生後8～12週ごろまで）</p> <p>[人物弁別をとまなわない定位と発信]</p> <p>人とかかわりのための様々な反応や行動（人に対してにっこりしたり、じっとみつめたり、目で追ったり、声を出したり、傍にいる人に手を伸ばしたり、掴んだり、など）がみられるようになる。しかしこの段階では、これらの反応や行動を向ける対象が特定されているわけではない。</p>
<p>第2段階（生後12週ごろから6ヶ月ごろまで）</p> <p>[ひとり（または数人）の弁別された人物に対する定位と発信]</p> <p>人とかかわりのための様々な反応や行動が増える。また、例えば母親に対して、他の人よりも余計に微笑んだり、よく声を発するというように、特定の人に対する“好み”がみられるようになる。しかし、特定の対象に対するはっきりとした愛着行動は次の段階から始まる。</p>
<p>第3段階（6ヶ月ごろから2、3歳ごろまで）</p> <p>[発信ならびに移動による弁別された人物への接近の維持]</p> <p>特定の人（例えば、母親）を他の人々とははっきり区別して、特定の対象に対する接近・接触を求める。この頃になると、多くの乳児は特定の人（例えば、母親）に対して愛着と期待が十分に発達していることを示すようになる。例えば、他の人がいなくても平気なのに、母親がみえないと悲しんで泣き出す。この時、他の人があやしても泣き止まないのに、再び母親が目の前に現れ、抱き上げたり、あやしたりすると泣き止んだりする。</p>

第4段階 (3歳前後から)

[目標修正的協調性の形成*]

愛着の対象(例えば、母親)と離れていても、その対象との絆をしっかりと心の中に保ち続けることができるようになる。この頃になると、多くの幼児は安全の基地を心の中に保ちつづけることができるようになる。例えば母親がみえるところになくても、「こういうつもりで、こういうことをしているからだ」ということを洞察できるようになる。

* 「目標修正的協調性の形成」: 相手の目標(例えば、母親は一人で買い物にでかけたいということ)を考慮に入れながら、自分の目標(例えば、おかしを買ってもらいたい)との間の調整(例えば、「わがままいわないから、連れていって」と言ったり、「お留守番するから、おかし買ってきて」と言う)をはかっていく経験を通して協調性の基礎が形成されるという意味。

図1 エインズワースらのストレンジシチュエーション法の8場面(繁多、1987を一部修正)⁶⁾

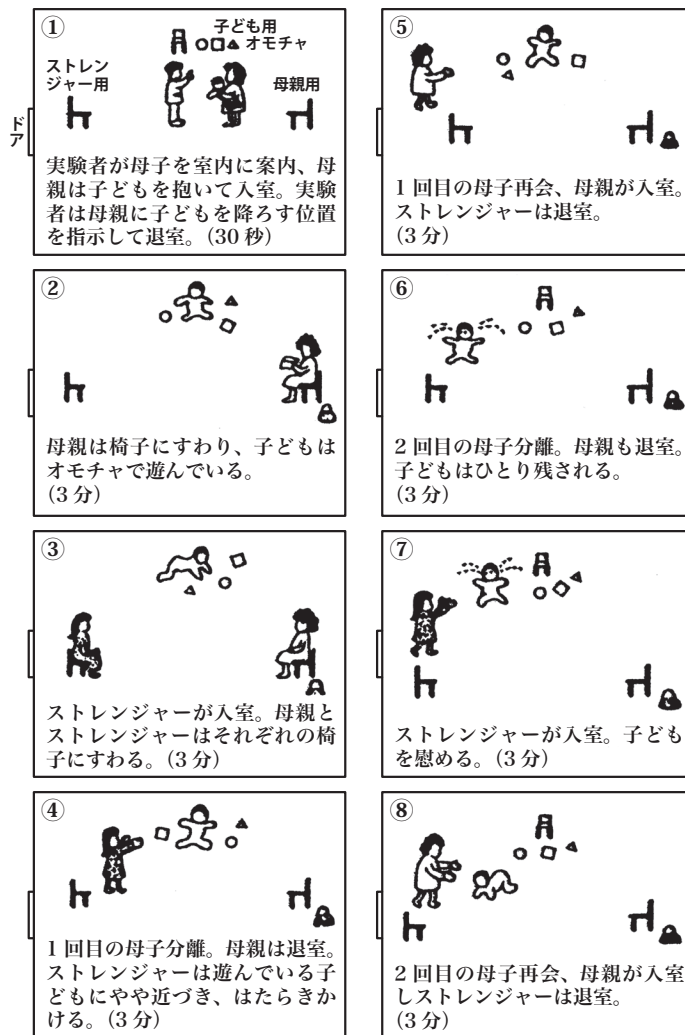


表2 愛着の質 (3タイプ)⁷⁾

<p>Aタイプ (回避群)</p> <p>これらの子どもは、親を安全の基地として探索活動を行うことがほとんどない。親を回避する行動がみられることを特徴としており、親との分離場面でも泣くことはめったになく、再会時にも親を無視したり避けたりなど嬉しそうな態度を示さない。日本では6.2%の子どもがこのパターンを示した。</p>
<p>Bタイプ (安定群)</p> <p>これらの子どもは、親を安全の基地として積極的に探索活動を行う。ストレンジャー (子どもにとっての見知らぬ人) に対しても肯定的な感情や態度を見せることが多い。親との分離場面では、親の退室に悲しみを示すが、親が戻ってくれば嬉しそうに親を迎え入れ、接触を積極的に求め、再び探索活動を始める。日本では79.2%の子どもがこのパターンを示した。</p>
<p>Cタイプ (アンビバレント群)</p> <p>これらの子どもは、親を安全の基地として探索活動を起こすことがあまりできない (親との分離場面エピソード前から、不安の兆候を示す)。親との分離場面では、非常に強い不安を示し、親が戻ってきても、強く身体的な接触を求めながら、同時に親を激しく叩くなどして怒りを表し、反抗的な態度を取る。日本では14.6%の子どもがこのパターンを示した。</p>

*それぞれのタイプの日本の%は繁多 (1987) の研究による。

そしてその後⁵⁾、(Ainsworthら ((1978))) が重要な方向性へと発展させていった。この理論の出発点となる前提は、他の多くの生物種と同じように、人には、他者との社会的生活を希求する生得的な志向性があるということである。もっと明細に言うならば、Attachment理論は、人には、『主要な養育者』として機能し得る人物に対しての種々のAttachment行動 (例えば、そうした人物に対する探索行動、身体接触、注視行動、追従行動、視覚的追跡行動) を起こすという事である。そして、[図1](#)の様な場面を設定し — ストレンジ・シチュエーション法 (SSP)、1歳児 (Bowlbyの発達過程では第3段階…6ヵ月～2、3歳ごろまで) の反応を見、[表2](#)の様な3つのattachmentの質に分類した。この回避、安定、アンビバレントの3つのタイプに分類された事で、安定と分類された乳幼児の養育環境の質、および様々な社会情緒的発達との連関を問う研究が、先述した縦断研究法を取り入れた一部の研究も含め、多くなされて来た。元来Bowlbyが仮定したattachment理論は、人生の比較的早期に焦点を当てたもので、生涯にわたる連続性を真の意味で明らかにし得るものではなかった。) ところが、縦断研究法の限界、^{*}後で詳しく考察しようと計画している臨床的視点から、このAttachment理論を1980年代後半から生涯にわたる連続性として捉え直す動きが出て来た。

*この「後で」は、今回の論文では載せきれないので、次回以後の論文で述べるという意味である。以後の「後で」も同意味

それは精神分析学と同じ想起を使う方法で、その1つがMain⁸⁾らによるアダルト・アタッチメント・インタビュー (AAI) である。⁹⁾ (それは、両親 ((それに代わる主要な養育者)) との関係について子ども時代のことを想起し語ってもらう中で、個人のアタッチメント・システムの活性化を促すよう工夫されており、「無意識を警かす」ことで、被面接者自身も通常、意識化し得ないアタッチメントに関する情報処理過程の個人的特性、すなわち内的作業モデ

ルの特質を抽出するよう仕組まれている。前述した乳幼児期におけるSSPが実際にその場にいる養育者に対する「物理的な」近接の仕方を問題にするものであるとすれば、このAAIは記憶の中にある過去の養育者に対する「表象的な」近接のあり方を問題にする手法であると言え、両者は同じく養育者に対する近接可能性や、そこに伴う葛藤や不安等の感情を巧みにすくい上げるという意味において、その間には明確な理論的対応性が仮定されるのである。)とされている。2つ目が、AAIの考えを基礎に作られHazanとShaver¹⁰⁾が提示した自己報告的質問紙という方法である。¹⁰⁾によれば(この方法は簡便さも手伝って、その後の研究の主流になっていった。すなわち、友人関係や恋愛・配偶関係およびそれらの中における孤独や葛藤あるいは感情調節などに関心を有していた社会人格心理学の研究者の間に瞬く間に拡がっていったのである。その理由の主なものとして、それまで個々ばらばらな理論枠に依拠し、相互独立的であった種々の社会人格心理学の領域を、アタッチメントのタイプや次元という共通の枠組みをもって、有機的につなぎ得るようになったことであろう。)と述べている。¹⁰⁾(そしてこの自己報告式のアダルトアタッチメントの測度では、スコアに基づき、個人のアタッチメントの特徴を、前述のSSPのBタイプ(安定型)は同じであるが、Aタイプ、Cタイプでは、その内容を分解され、不安型、拒絶・回避型、恐れ・回避型の3つにカテゴライズされる事もある。)¹¹⁾(不安型は、アタッチメント対象からケアと注意を求めようとする強力な欲求と、そうした欲求にアタッチメント対象が応じ得るだけの力があるか、あるいは応じようとする意志があるのか、といった事に関する深く広範な疑念とが結びついたもので、)親など特定の養育者の関係を回避しようとする気持は低いタイプと、とらえている。次に、拒絶・回避型は、上述の不安は強くないが、関係を回避しようとする傾向が強いタイプであり、さらに、恐れ・回避型は、不安も強く、関係を回避しようとする傾向も強いタイプである。以上4つのタイプに自己報告式では分けたのであるが、今日のアダルトアタッチメントは、安定型、不安型、回避型の3つの次元に焦点を当てたものが多くなる傾向になっている。その中で、アダルトアタッチメントが不安型、回避型に分類される青年期前後の人は、どの様な環境を受けた事が、その原因になったかを見た研究の、1つの代表的な研究を見ていく。

それは¹²⁾(イスラエルのMikulincerの実験室で行なわれた研究で、表3で示す様な結果を出している。すなわち4歳未満の時点で父親の死あるいは両親の離婚を経験していた青年は、両親がそろっている家族や4歳以後に両親が離婚した家庭で育った青年に比べて、アタッチメント不安および回避をより高く報告するという事が明らかになった。加えて、イスラエルで集団就寝形態のキブツ(これは幼少期において安定型アタッチメントを崩壊させることで知られている生態学的要因である：¹³⁾Sagi et al.))において育った青年は、家庭就寝形態を基本とするキブツで育った青年に比べて、アタッチメント不安および回避の尺度得点が高かった。(キブツとは、イスラエルにある共同体のことであり、乳児は生後1、2ヵ月から、「乳児の家」において集団保育される。日中は他国と集団保育と大きな違いはないが、夜間の就寝形態に特徴がある。すなわち、親の元で一緒に寝るキブツだけでなく、親と離れて子どもどうして寝るキブツもまた存在するのである。))、以上の様な結果と似たものが、イス

表3 研究対象群における自己報告式アタッチメント得点の平均値と標準偏差 (Mikulincer等, 2001)

研究対象群	n	アタッチメント回避		アタッチメント不安	
		M	SD	M	SD
〈親の死研究〉					
子どもが4歳未満での父親の死	50	3.76	1.24	3.87	1.25
両親が健在な家庭	50	3.02	1.27	3.09	1.24
F (1, 98)		8.57**		9.79**	
〈親の離婚研究〉					
子どもが4歳未満での離婚	40	3.89	1.29	3.96	1.38
4歳から9歳の間での離婚	40	3.01	0.97	3.27	1.31
10歳以後での離婚	40	2.88	1.20	3.18	1.32
離婚していない家庭	40	3.05	1.26	3.13	1.25
F (3, 156)		6.02**		3.53*	
〈就寝形態〉					
集団就寝形態	55	3.58	1.32	3.79	1.17
家庭就寝形態	55	2.94	1.23	3.16	1.15
F (1, 108)		6.80*		8.12*	

*p < .05, **p < .01

ラエルの青年女性を対象とした研究¹⁴⁾でも出されている。) (また自己報告式で青年期の恋人への依存と度合を行なったSampsonの研究¹⁵⁾でも、恋人への依存に対する抵抗のなさ、アタッチメント回避型で、20年間にわたる長期の相関係数が、.44と高い値を示した。) 以上の様な研究結果があっても、アダルトアタッチメントの乳幼児からの持続性、普遍性を断定的に関係づけるものではないが、—それはBowlbyは、アタッチメントシステムは、生涯を通じて変化してるゆえ、心理療法は無益なものでないと考えている—、ある程度関係があるものと考えていいと思われる。

4. Attachment理論の乳幼児期に重要性を見る、理論的背景

W.スティーブン等¹⁶⁾によると、その理論的背景を次の様に述べている。(Bowlbyは、4つの異なっているが相互に関連した分類、つまり近接維持 ((proximity maintenance))、安全な避難場所 ((safe haven))、分離苦悩 ((separation distress))、安全な基地 ((secure base))、によって、アタッチメントを定義した。これらの行動は、健常な1歳の幼児において主要な養育者 ((通常は母親)) との関係の中で容易に観察される。幼児は、常に養育者の所在をモニターし、望ましい程度の近接を維持するために必要な調整を行ない、また、脅威を感じる出来事の際に安全な避難場所として養育者のところに逃げ帰ったり、『養育者からの分離に激しく抵抗するとともに、苦痛を感じ』、さらに、環境を探索するための安全の基地として養育者を利用する。幼児は、しばしばアタッチメントが形成されていない相手に対してもこれらの行動の1つまたはいくつかを向けることがある。重要なのは、アタッチメン

トを定義することは、特定の個人に対して、これら4つの行動のすべてを選択的に向けることである。

そしてBowlbyは、前掲した表1と同じ内容であるが、養育者に対する乳幼児のアタッチメントの発達には4つの段階があると提唱し、後にAinsworthが次のように精緻化し命名している。すなわち第1期の前アタッチメント期 (preattachment) (およそ、0～2か月) においては、乳児は生得的にほとんど誰に対しても、興味を示し、反応し、ほとんど誰からも社会的接触を引き出すことに長けており、相互作用に対して比較的開放的で、世話を受け入れる。次の第2期のアタッチメント形成期 (attachment-in-the-making) (2～6か月) においては、幼児は特定の人に対して選択的に社会的なシグナル (微笑、発声、泣き) を向けたり、他と異なった反応 (より熱烈に歓迎する、より早く落ち着く) をしたりする事で養育者を区別し始める。また第3期の明確なアタッチメント期 (clear-cut attachment) (6か月～2・3歳頃) においては、アタッチメントを定義する行動のすべてが見られるが、より重要なのは、それらの行動が『特定の養育者を中心として組織化される』ことである。これは幼児が積極的に近接を維持したり (分化されたあと追い)、養育者を安全な避難場所 (分化された慰め求め) や安全な基地 (分化された探索) にしようとする時や、分離によって混乱している (分化された苦痛) 際にはっきりする。最後の段階つまり第4期の目標修正パートナーシップ (goal-corrected partnership) (3歳頃) においては、子どもは『物理的近接への切迫した欲求を低減させ』、分離と有効性に関して養育者たちと交渉ができるようになる。)。

以上、Bowlbyの提唱したものを基にAinsworthの命名したアタッチメントの発達の様相を見てきたが、今日の日本社会において、例えば乳児院のように乳児期から親が主たる養育者になりえない場合がある。また多くの子どもが預けられている保育所では、主たる養育者が親であっても、その役目を負う事が出来ない親が多く見られる。さらに育児休業制度の未整備などから来る、アタッチメント理論から見れば、将来問題が積み残されるであろう、早期から子どもを保育所に預ける親が多くあり、これが大都市の待機児問題を発生させている。この様な種々な問題についての考察は、別の機会にしたい。

5. Life cycle理論による、青年期前後のアイデンティティ達成の意味

Eriksonが提唱したLife cycle理論は、乳児期から始まり高齢期までと、生涯発達のモデルを示しているが、その中で特に強く光を当てられたのが、青年期のアイデンティティ (自己同一性) という言葉である。

8

岡本¹⁷⁾によると、(このアイデンティティは、西欧の男性的自我の発達を念頭においた分離一個体化、自律性を発達の指標とする、個としての人間発達観である。そして、中心的テーマは、(自分は何者であるか、自分は何になるのか)) であり、発達の方向性は、(積極的な自己実現の達成) である。その特徴として (1. 分離・個体化の発達 2. 他者の反応や外的統制によらない自律的行動 3. 他者は自己と同等の不可侵の権利をもった存在) と記している。さらに人間相互の関連性・影響については (1. 他者の成長や自己実現への援助

ができるためには、個としてのアイデンティティが達成されていることが前提となる。
 2. 他者の成長や自己実現への援助ができるためには、常に個としてのアイデンティティも成長・発達しつづけていることが重要である。)と考えている。)と説明されている。
 さらに(この青年期のアイデンティティの地位(状態)がどうなのかは、表4¹⁸⁾にまとめられており、それが発達の全段階でどの様な状態だったのかは、表5¹⁹⁾に整理されている。

表4 マーシアの自我同一性地位 (Marcia, J.E., 1966 ; 無藤, 1979より)

自我同一性地位	危機	傾倒	概 略
同一性達成 (identity achievement)	経験した	している	幼児期からのあり方について確信がなくなり、いくつかの可能性について本気で考えた末、自分自身の解決に達して、それに基づいて行動している。
モラトリアム (moratorium)	その最中	しようとしている	いくつかの選択肢について迷っているところで、その不確かさを克服しようと一生懸命努力している。
早期完了 (foreclosure)	経験していない	している	自分の目標と親の目標の間に不協和がない。どんな体験も、幼児期以来の信念を補強するだけになっている。硬さ(融通のきかなさ)が特徴的。
同一性拡散 (identity diffusion)	経験していない	していない	危機前 (pre-crisis) : 今まで本当に何者かであった経験がないので、何者かである自分を想像することは不可能。
	経験した	していない	危機後 (post-crisis) : すべてのことが可能だし可能なままにしておかなければならない。

表5 心理社会的発達の全段階 (Erikson, E.H., 1963より)

段 階	心理社会的危機	好ましい結果の場合	好ましくない結果の場合
0歳	信頼 対 不信	環境および将来の出来事に対する信頼	将来の出来事に対する疑惑と不安
1歳	自律 対 疑惑	自己統制感と満足感	恥と自己嫌疑の感情
2～4歳	自主性 対 罪悪感	自発的に行為する能力	罪悪感と自己に対する不満感
5歳から思春期へ	勤勉性 対 劣等感	どのように事が運ぶか、どのように理解するか、どのように組織化するかを学習する能力	理解と組織化のさいに生じる劣等感
青年期	自己同一性 対 同一性拡散	自己をユニークな、統合された人間と見る	自分が実際誰なのか、どんな人間か、ということについて混乱が生じる
成人初期	親密 対 孤立	他者とかかわりあい、他者を愛する能力	愛情関係形成することの不能
成人中期	生産性 対 自己陶醉	家族および社会一般に関心をもつ	自分のこと — 自分の幸福と繁栄だけに関心をもつ
老年期	統合性 対 絶望	完成感と満足感。進んで死に直面する	生活への不満感。死を予想することによる絶望

以上の表4、5から、青年期の自己同一性の達成は、0歳から信頼や自律、自主性、さらに5歳からは、どのように事が運ぶか、どのように理解するか、どのように組織化するかを学習する能力を身につける事によって、なされると考えられている。そして青年期になり、今までの体験の上で、いくつかの可能性について考えた上、自分自身の解決に達し、それに基づいた行動をとれる状態になった事を意味している。

一方、自己同一性の拡散は、0歳から不信や疑惑、罪悪感、さらに5歳からは、理解と組織化のさいに生じる劣等感を持つと考えられている。そして青年期になって、自己同一性の危機前は、今まで本当に自分が何者かであった経験がないので、何者かである自分を想像する事は不可能な状態である。ただ、危機を経験した自己同一性の危機後は、すべての事が可能だし、可能なままにしておかなければならない状態だと考えられる。

以上の様に、青年期の自己同一性の確立と拡散は、乳幼児期からの好ましい結果・好ましくない結果と考えられ、その確立が成されるか、成されないかによって、その後の成人初期の親密対孤立、成人中期の生産性對自己陶醉、高齢期の統合性対絶望といった、2つの対立する言葉で代表される人生が、待っていると理解されているのである。

このエリクソンの考えに基づいた数例の研究をあげてみる。まずはKalikow, J.H.²⁰⁾が行なったもので、対象者は20代の大学院生92名である。彼らに、友人関係の満足度（成人前期の親密性の状態）を調べたところ、0歳から4歳までの3段階の心理社会的発達で、満足度の高い人ほど、この発達が十分なされているという、有意な関連性が認められた。さらにKroger²¹⁾は、大学生を対象とし、想起法を用いた、青年期のアイデンティティの地位と、幼児期の心理社会的課題の達成度に、関連性を見出している。またHartの研究²²⁾によると、約半数の人々は、青年期のアイデンティティの地位が成人期にも維持されているという事を明らかにしている。以上の研究結果も、乳幼児期の自我の発達が後のアイデンティティ発達レベルに関連しており、エリクソンの考を支持したものになっている。

6. 個としてのアイデンティティ達成から、 関係性にもとづくアイデンティティ達成の視点に

Eriksonのアイデンティティの考えは、個としての人間発達観である。それに対して岡本¹⁷⁾は、(近年、人とのつながりや、相互協調性、配慮やケアといった、関係性の視点から心の発達をとらえようとする発達観が注目されている。この関係性にもとづくアイデンティティ発達を中心テーマは、(自分はだれのために存在するか。自分は他者の役にたつのか)である。そして発達の方向性は、(他者の成長・自己実現への援助)である。その特徴として(1. 愛着と共感の発達 2. 他者の欲求・願望を感じとり、その満足をめざす反動的行動—世話・思いやり— 3. 自己と他者は互いの具体的な関係の中に埋没し、拘束され、責任を負う)と記している。さらに人間相互の関連性・影響については(1. 他者の役に立つことから体験される自己確信と自信 2. 関係性にもとづくアイデンティティの達成により、生活や人生のさまざまな局面に対応できる力、危機対応力、自我の柔軟性、しなやかさが獲得される)と考えている。¹⁷⁾(この様に個としてのアイデンティティ達成から、関係性にもと

づくアイデンティティ達成の理論を展開したものの代表的なものとして、Franz,C.E. & White,K.M.²³⁾ の、Eriksonの精神分析的個体分化を、個体化経路と愛着経路の2つに再構成した複線モデル…表6がある。

表6 Erikson理論を応用した生涯発達に関する複線 (two-path) モデル (Franz,C.E. & White,K.M., 1985より)

	乳児期	幼児前期	幼児後期	学童期	青年期	成人前期	成人中期	老年期
個体化経路	信頼 対 不信	自律性 対 恥・疑惑	自主性 対 罪悪感	勤勉性 対 劣等感	アイデンティティ 達成 対 アイデンティティ 拡散	職業及び ライフ スタイル の模索 対 漂流	ライフ スタイル の確立 対 空虚	統合性 対 絶望
アタッチメント 経路	信頼 対 不信	対象及び 自己の 恒常性 対 孤独・ 無力感	遊戯性 対 受身性 または 攻撃性	共感と協力 対 過度の警 戒または 権力	相互性・ 相互依存 対 疎外	親密性 対 孤立	世代性 対 自己陶醉	統合性 対 絶望

またJosselson,R.L.²⁴⁾ の関係性の発達を8つのレベルでとらえ、アイデンティティ発達の過程をとらえ直したものがある。

Eriksonのアイデンティティは、上述した様に、西欧の男性的自我の発達を念頭においた分離—個体化、自律性の発達を指標とした発達観である。一方この関係性にもとづくアイデンティティは、¹⁷⁾ (主として女性の研究者から提起された問題意識である。アイデンティティというライフサイクルを通じての全人格的な発達をとらえる問題にも、この視点は大いに貢献する)と思われるのである。なぜ、主に女性研究者から提起されたものであるか、それには、現代の日本を含む世界の女性の、青年期前後のアイデンティティ発達の特有の問題がある為だと思われる。

岡本¹⁷⁾ は(女性にとって、家庭建設と職業をどのように自らの生き方の中に組み込むかという問題と、アイデンティティ発達の関連性は、女性の生涯発達にとって中心的な課題である。Freedman,B.A.²⁵⁾ は、女子大学生を対象とした面接調査を行ない、家庭を優先するか、仕事のキャリアを優先するかという問題とアイデンティティ地位に高い相関がみられたとしている。すなわち、アイデンティティ達成の女性は、経済的な必要がなくてもキャリア遂行をめざし、就学前の子どもがいる時期にも就労を計画し、家庭とキャリアを同等またはキャリア優先に価値づけていた。一方、アイデンティティ達成がまだなされていない女性は、キャリアへの関与は低く、子どもの就学後に就労を計画し、家庭優先であった。また母親が子どもが幼ない時からフルタイムで働く事は、娘のキャリアへの高い関与を促進させる事が示唆された。)と述べている。

この様な家庭建設と職業を自分の生き方の中で組み入れ、¹⁷⁾ (「本当に自分らしい生き方」を求める声は、1970年代以後、(筆者の経験からは、日本では70年安保闘争のある面の終

焉と、女性のジェンダーフリー問題の高まりがあった時代だと思われる) 多くの女性から聞かれるようになり、今日、その声はますます大きく、多様化している。「私」とはいったい何者か、自分らしい生き方とはどういうものなのかという「自分」探しのテーマ、つまりアイデンティティの模索は、青年期だけの課題にとどまらず、今や一生を通じて、重要な課題意識となっている。その背景には、少子高齢社会の到来と、生き方の多様化、さらに男女共同参画社会への啓蒙など、社会と時代の大きな変容がある。しかしながら、その「自分らしい生き方」の探求は、成功しているとはいえない場合も少なくない。今日、主体的に自分の職業やライフスタイルを選択できるようになった事は、魅力的な社会の変化であることは確かであるが、選択した責任は自分にあるという圧迫感 ((これは日本の女性は、男性も言える事だが、幼ない時から、親の意向の中で、育てて来ており、西洋の幼ない時から自己決定力を育てるという養育が無い為だと、筆者は考える。)) また、また必ずしもすべての女性が主体的に生き方を選びとっているわけではないという現状がある。例えば、ポスト子育て期の女性のメンタルヘルスの問題は、男性よりも早くから認識されていた。すでに1960年代後半から空の巣症候群などに代表されるような専業主婦のメンタルヘルスの問題が注目されていた。さらに、女性の社会進出が進み、幼い子どもを育てながら働く職業・家庭両立型のライフスタイルを選択する女性の増加にともない、有職既婚女性のストレスやメンタルヘルスも認知され始めた。スーパーウーマン症候群などは、その代表的なものである。このような成人女性のメンタルヘルス上の問題は、今日さらに増加し、深刻化している。これらの問題の背景には、女性のアイデンティティ葛藤や、個としてのアイデンティティの希薄さに代表されるようなアイデンティティの危機が存在する。子育て期にある専業主婦にとってのそれは、子育てが「自分」のアイデンティティの支えにならないという問題に収斂される。昨今、大きな社会問題になっている幼児虐待も、その母親の心理の中には、自らのアイデンティティの喪失感があると言われている。両立型の女性の問題は、職業を通して達成される個としてのアイデンティティと、母親アイデンティティの葛藤やバランスの崩れが代表的な問題であろう。一方、シングル女性の場合は、職業人としてのアイデンティティの達成や有能感の体験の難しさ、中でも職場という男社会の中で、個としての自分と女性としての自分をどう調和させ、力を発揮していくのかという問題が多い。こうして見ると、生き方の多様化した今日の社会は、必ずしも女性に光をもたらしたとばかりは言えない。) と述べている。だがこの文の中で、「子育て期にある専業主婦にとってのそれは、子育てが『自分』のアイデンティティの支えにならないという問題に収斂される。」とあるが、多くの論者の中に、本当に自分の子を産み、親身になって子どもを育てた経験の上で論じているのか、大いに疑問の残る内容と思われる。この論に限らず、子育てに関連する専門分野の発言の中に、この様に「まず理論が有り、資料やデータで合理化する」という傾向が強すぎはしないか、筆者は危惧している。なぜなら、この専門分野の発言と、実際親身になって子育てしている親や、親代わりに親身になって保育している人達の間、大きなギャップがある様に思えてならない。これは女性のアイデンティティが、職業・母親両立型という事を前提にしており、この考えを具現化する為の日本の現状の施策が十分でない事が、その原因の大きな1つである事

は否定出来ない為であろう。これらについての筆者の考えは、後で詳しく述べたいと思う。

7. 関係性にもとづくアイデンティティの生涯発達への、

Bowlbyのアタッチメント理論導入の意義

アイデンティティの問題は、あくまでの青年期のもので、その前の発達の段階については、個体化経路という形でEriksonが理論化している。しかし、個体化でなく、関係性という視点から見るとすると、別の理論が必要となってくる。関係性の中心テーマである「自分はだれのために存在するのか。自分は他者の役にたつのか」という事が要求されるとすれば、「親が子の為」という関係を理論化したBowlbyのアタッチメント理論を導入するのは、自然の流れであろう。前述したFranz, C.E. & White, K.M.の複線モデル…表6の、アタッチメント経路がその考えに沿ったものと思われる。これを詳細に見ていくと、乳児期の「信頼」対「不信」は、個体化経路と同じ用語を使って違いはない。ところが幼児前期（1歳～3歳前後）では、アタッチメント経路で、「対象及び自己の恒常性」対「孤独・無力感」という言葉で説明されている。これは、Bowlbyの愛着の発達過程…表1の、第3段階と第4段階の内容を示したものと理解される。すなわち関係性の主体が子で、客体が親又は他の主要な養育者と考えると、乳児期で「信頼」を獲得した子の第3段階では、特定な人と他の人々とはっきり区別して、特定の対象に対する接近・接触を求める。この頃になると、多くの子は特定の人に対して愛着と期待が十分に発達してくる。そして第4段階になると、多くの子は、『愛着の対象と離れていても、その対象との絆をしっかりと心の中に保ち続けることができる』ようになる。また多くの子は安全の基地を心の中に保ちつづけることができるようになる。例えば母親がみえるところになくても、「こういうつもりで、こういうことをしているからだ」という事を洞察できるようになる。すなわちこの頃になると、「主体である自己と、客体である特定の対象との、愛着関係は成立しており、その関係は永久に変わらない恒常性を持っている。」と多くの子が思える様になるのである。一方、乳児期に「不信」しか得られなかった子は、第3段階で、特定の対象に対する接近・接触を求める事が少なく、愛着が十分発達しない。そして第4段階になると、特定の対象への絆をしっかりと心の中に持ち続けることが出来ず、安全の基地を心の中に持ち続けることができないのである。すなわち「主体である子は、客体である特定の対象との、愛着関係は十分に成立しておらず、絆の恒常性も持ち得てないし、安全の基地を心の中に持ち続けることができない状態である。」これが、子どもは自分一人で生きるしかない。その状態を自分の力では、どうしても解決出来ない、という事で「孤立・無力感」という言葉で表わされていると思われる。そして、この状態で成長する事で、表6によると青年期には「疎外」という言葉で表現されている状態に、陥る事になりやすいと考えられている。この状態の問題は後で詳しく述べたい。

8. BowlbyのAttachment理論や、EriksonのLife cycle理論から、 問題点が浮かび上がる3歳未満児保育

関係性にもとづくアイデンティティの発達を見る上で、乳幼児期のアタッチメント経路からとらえていく視点は、理論構築に重要な位置を占めていると思われる。この視点を、先述した、現在日本で問題となっている待機児にからませて、ここでは考えてみたい。すなわち、多くは大都市の現象であるが、多くの親が、子どもを保育所などに預けて働きに出たいと思っているが、預ってもらえる場所がなく、働きに出られないという状態であり、これに対する不満の声大きいという事である。この状態に対して、行政府は、子どもにとって保育条件の悪化しか考えられない、保育所設置基準の緩和や、他の施設の強化などで、親の要求に答えようとしているが、まだ十分に要求が満たされたという状況にはなっていない。

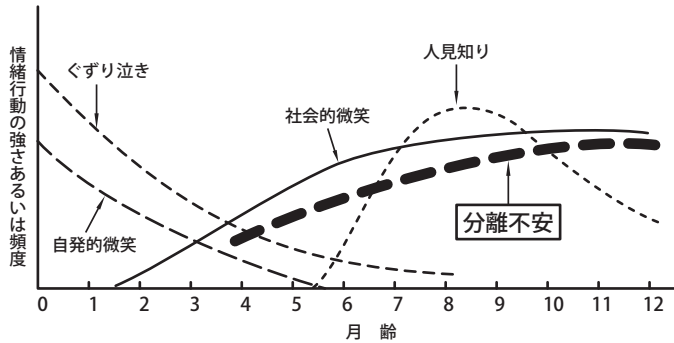
後で詳しく述べようと思うが、現在の日本の産休、育児休業制度では、条件の良いものでも、賃金がそれ程減少せず休めるのは、子どもが1歳までで、条件がそれ以下のものも数多く存在する。この様な条件下で、子どもを産んで、その後再度職場に復帰したいと考える親は、待機児の対象年齢のほとんどを占める、3歳未満児保育…通称=乳児保育、未満児保育、に是非とも入所させようとするのである。そして、その受け手となる保育所に勤務する保育士・教師を育てているのが私達なのである。現在は大都市圏にあることで、学生への求人も多く、就職難と言われる時代でも高い就職率を示している。

この様な時代に、ようやく入所出来た子どもの親は内心ほっとし、職場に復帰し、一件落着くと思うだろうし、それも納得は出来る。しかし、子どもの視点で考えると、今まで見たBowlbyやEriksonそして、それを合わせたFranz等の理論から、3歳未満児保育には大きな問題点があると危惧されるのである。

その大きな問題点というのは、親子のアタッチメントの問題、この一言に限ると言って良い。なぜなら、Franz等の理論で説明するならば、ようやく入所した乳幼児は、多くは親である特定の対象者との間に「愛着関係は十分成立せず、絆の恒常性も持ち得てないし、安全の基地を心の中に持ち続けることができない状態」で育っている危険性があるのである。そして無理矢理離され、そこで分離不安に陥るのである。

筆者は数年前、ある保育所で、4月初めの慣らし保育といわれる時期、親も数時間保育所に留るので、その時間 親子関係などについて、講演を頼まれた事があった。この時、1歳頃の子どもは、慣らしという事で、親の手から保育者の手に渡されるのだが、当然渡された瞬間から泣き始め、講演中泣き声はやまず、親も心配で私の話など頭の中には入らなかったのではないかとされた。この泣きは、一般的には日数を経過する事で、多くの子どもは止まるのであり、親や保育者は、ようやく新しい環境に慣れて来たと思うであろう。この話を本学生にすると、100人中100人が「慣れて来たからだ」と答える。ところが筆者はこの答にいつも疑問を持っていて、「そうかな？子どもは泣いても親は自分を置いて職場に行く。どんなにいやだと泣いても変えられないから、あきらめて泣くのをやめたのではないかと解釈する様にしている。Franz等の理論でいけば「孤立、無力感」を、この時点で形成していると考えている。

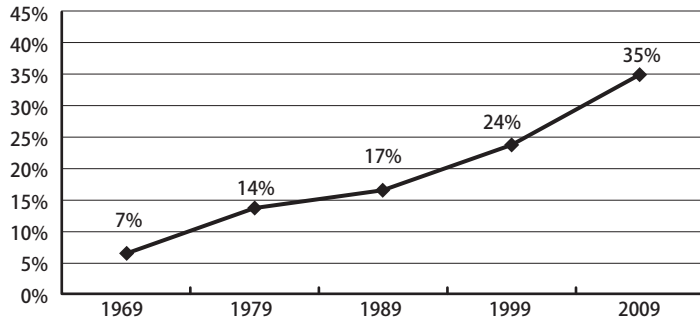
図2 生後1年間の情緒の表出 (Plutchik, 1980)



もう30年前Attachment理論が注目された時、1歳時点で保育所に入所させる事に、問題を感じる専門家の数は、少なくなかった。これは、[図2](#)²⁶⁾は、生後1年間の情緒の表出を見たものであるが、この中で「分離不安」のところを見ると、生後4ヵ月頃から見られ、1歳までその強さ、頻度は上昇の一途である。この状態のまままで育休が終わったからという大人の論理で、無理矢理、親から離されるのである。力の無い、泣く事しか知らない子どもが、「孤立、無力感」を感じるのは当然であろう。

最近、学生の実習の様子を窺い、アドバイスをするという意味で、関東地域の保育所を10数カ所訪問する機会があった。実習上の問題に1つの区切りが来ると、次に話題になるのが、最近の保育所の傾向である。筆者も養成の一員として、現場の実状を知る必要があり、園長さんも話したいし、筆者の意見も聞きたいという事で、時には長話しになった事も多かった。そこで一様に話題になったのが、親の子どもや園に対する姿勢の問題である。その中の数例をここに挙げてみる。「10年ぐらい前の親に較べて、自己中心的な親が目立つ」「夕方迎えに来る時、子どもは喜んで親の元に走り、顔を見ようとするが、親は子どもの顔を見ず、帰宅の準備に集中するのみである」「下の子の妊娠中である事もあろうが、子どもを抱かなくてよい方法は無いかと、園側に尋ねる」「帰宅時間までに迎えに来ない親が数多く見かける、時には勤務先から直接来ず、途中でお茶したり、夏場は自宅でシャワーして迎えが遅くなる親もいる」「親自身は手がすいているのに、保育園に預けられるという事で、時間一杯預ける親が多い」「最近土、日の休日は、家庭でいい子(仮面をつけている)で、すごしている為か、その分月曜日に発散する子(仮面をはずしている)が多い、月曜症候群の子が目立つ」「虫にさされると、他の子と比べて、大きく腫れる子の親ではあったが、その虫のいる園庭の大木…子どもにとっては自然観察の対象であったり、夏場の木陰であったりして大切なもの…を、全部切ってくれと要求して来た。この時は、下草をきちんと刈る事で了解してもらった」「保育所は数年間の関係なのに、親子の関係は一生続くもの、どうしても無理な場合はわかるが、生後直後から他人に預ける程度の愛情しか持たない親と子の間に、望ましい親子関係が育つとは、到底思えない」などであった。以上の様に、現場の園長は、子どもの視点から見た、3歳未満児保育の現象に多大なる危機感を持っている。ある園長がそれを「愛着障がい」と、そのままずばり表現した時、その深刻さに現場の苦闘を感じたの

図3 3歳未満児の全入所児に対する割合^{28) 29)}より作成



である。一般に保育士、教師、医師、看護師、介護士など、「人」を対象として仕事をしている人の中に、家庭と仕事の両立の困難性と、家庭でも「人」だという事で、身内の問題をかかえている人が多いと言われている。これは後で述べるが、私も数多く体験している。この事を考えると、園長も身近に色々な問題を体験し、この様な発言が多かったかも知れない。

しかし、この様な現状があっても、行政側は、年間1人当たり²⁷⁾(例…横浜市 3歳未満児平均の年間経費は、平成24年度、国費や保護者負担を含め、230万4千円)の金を使い、3歳未満児保育を続けようとしている。いや、続けるどころか親の要望に応じて拡大しようとしている。鈴木²⁸⁾や、厚生労働省統計情報部²⁹⁾の発言内容や資料によると、図3の様になり、1969年の7%から始まり、10年間隔で見えていくと、1979年14%、1989年17%、その後90年代から増加度が加速し、1999年24%、そして直近の2009年には、1967年の5倍に当たる35%に達している。これは1990年代に入り、バブルが弾け、日本経済の低迷に伴う、女性労働の要求が強くなった事がその一因と考えられ、その傾向は現在でも続いている。

だが、危惧されるのは、この状況は、あくまでも、大人の要求、視点からのみのものであり、言葉を十分駆使出来ず、国政への参政権も持たない子どもの気持は、全く無視されたものになっている事である。上述した園長の話から、「愛着障がい」のまま育った子どもが、その後、社会的不適応状態にまでなる事、又危惧が今日強く指摘されている。紙面上限りがあるので、この点については、後で述べようと思う。

まとめ

乳幼児期のAttachment理論を中心とした親子関係が、青年期前後の人格形成にどう影響するのか、具体的中心テーマである、3歳未満児保育にどんな問題点があるのか、について、BowlbyやEriksonの理論を用いて概観した。そこで主旨となったものは、以下の通りである。

1. 発達研究法として、縦断的研究がなされるが、5つの点で問題点がある。特に一番必要とされるフォロー出来ない対象者を除外した結果は、科学性に疑問が残る。
2. 精神分析学から出されたBowlbyやEriksonの発達学は、想起法という主観的要素は残しながらでも、目を得たものとして評価されている。

3. BowlbyのAttachment理論は、乳幼児期のみでなく、青年期前後の時期の人格形成の関わりについて、AAIやSSPの方法を用いる事で、再び注目されている。
4. Attachment理論の重要性の理論的背景となるのは、子の親に対する、近接維持、安全な避難場所、安全場所の確保の要求と、分離苦悩を避ける事である。これを発達上でみても、3歳未満児保育を実施する事は、この要求を受け入れない事になる。
5. Eriksonのアイデンティティ理論を個から関係性のものとしてとらえる事で、Bowlbyのアタッチメント理論との連携がなされた。この結果、女性のアイデンティティ確立を、家庭と職業の両立という視点からとらえる事が出来る様になる。
6. 関係性のアイデンティティ理論とアタッチメント理論の連携は、乳幼児期に大切な親を中心とした特定な人へのAttachmentの恒常性を獲得するのか、あるいはされず孤独・無力感を味わうかとなる。そして後者の場合それが青年期前後の疎外という心的状況におかれる危険性を生みだしている。
7. 現場の保育所において、Attachment不足を作り上げている現状が報告され、現場からも、3歳未満児保育の問題点が浮かび上って来た。しかしこの保育のニーズは高く、増加の一途をたどっている。

引用・参考文献

- 1) 萩原英敏、野田雅子 著「乳幼児のきこえ」信山社 1989
- 2) 萩原英敏、望月武子 他「知能発達の、ここ30年間にわたる経年的変化に関する研究
— その1 I.Q.の経年的変化とI.Q.に関わる諸要因について— 日本総合愛育研究所紀要 第20集 1984 P301-325
- 3) 三宅和夫 編著「乳幼児の人格形成と母子関係」東京大学出版会 1992
- 4) 菅原ますみ、北村俊則、戸田まり、島悟、佐藤達哉、向井隆代「子どもの問題行動の発達
— Externalizingな問題傾向に関する生後11年間の縦断研究から」発達心理学研究Vol.10 P32-45 1999
- 5) 6) 7) 繁田進 著「愛着の発達(現代心理学ブックス78)」大日本図書 1987
- 8) Main,M. & Goldwyn,R. Adult attachment scoring and classification systems (2nd ed.) . Unpublished manuscript. University of California-Berkeley. 1994
- 9) 10) 11) 12) 14) 15) 16)
W.スティーブン・ロールズジェフリー・A・シンプソン 編、遠藤利彦、谷口引一、金政祐司、串崎真志 監訳「成人のアタッチメント」北大路書房 2008
- 13) Sagi,A.van Uzendoorn.M.H.Aviezer.O & Donnell,E. Sleeping out of home in a Kibbuts communal arrangement.It makes a difference for infant-mother attachment. Child Development 65 992-1004 1994
- 17) 岡本祐子 編著「アイデンティティ生涯発達論の射程」ミネルヴァ書房 2002
- 18) Marcia,J.E. Development and validation of ego identity status. Journal of Personality and Social Psychology. 13 551-558 1966
- 19) Erikson,E.H. Childhood and Society (2nd ed) W.W.Norton & Company (仁科弥生 訳 幼児期と社会 I .II.みすず書房) 1963

- 20) Kalikow, J.H. Adult friendship patterns and their relationship to Erikson's epigenetic developmental theory. *Dissertation Abstracts International*. 49 (9-A) , 2540. 1989
- 21) Kroger, J. Ego structuralization in late adolescence as seen through early memories and ego identity status. *Journal of Adolescence*. 13 (1) . 65-77 1990
- 22) Hart, B.L. Longitudinal study of women's identity status. *Dissertation Abstracts International*. 50 (10-B) 4807 1990
- 23) Franz, C.E. & White, K.M. Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*. 53. 224-256 1985
- 24) Josselson, R.L. *The space between us* Jossey-Bess Publishers. 1992
- 25) Freedman, B.A. Ego identity status and the family and career priorities of college women. *Dissertation Abstracts International*. 48 (5-B) 1528 1987
- 26) Plutchik, R. *Emotion: psychoevolutionary synthesis*. Harper and Row 1980
- 27) 産経新聞朝刊 1月11日 2012
- 28) 鈴木佐喜子「3歳児神話を検証する2 ～育児の現場から」日本赤ちゃん学第1回学術集会 2001
- 29) 厚生労働省 社会福祉施設等調査報告 2010